

2016 JUA/AUA Resident Program 参加報告

丹 羽 直 也 (慶應義塾大)

私は幸運なことに2016年度のJUA/AUA Resident Programのメンバーの一員に選出され、2016年5月6日から10日にかけて米国San Diegoで開催された第111回米国泌尿器科学会年次総会（AUA annual meeting）に参加させて頂きました。

本プログラムは、JUAと海外学会との国際交流事業の一環として2009年度より開始され、今年で8年目になります。本プログラムの特徴は、学会参加費と宿泊費のサポートのもと、単に学会に出席するのみならず、レセプションやその他学会期間中に開催されるイベント等に参加できるというものです。私自身はAUAの参加自体今回が初めてであり、若干緊張しながら日本を出発しました。

学会開催日前日の5日にSan Diegoに到着、用意して頂いたSheraton San Diego Hotel & Marinaにチェックインし翌日早朝から学会場に向かいました。ホテルは学会場（San Diego Convention Center）からはやや離れた場所にありましたが、バスが定期的に運行していたことから、全く迷うことなく学会場に到着することができました。出発前からAUAに参加した経験のある先生方よりスケールの大きさを聞いてはおりましたが、実際に会場につくとまずその広さに驚かされました。一階の企業の展示場は端から端まで見渡せないほどで、展示している企業・団体の数も日本の総会を遥かに凌ぐものでした。Plenary Session等が開かれたメインホールも最後尾の席からでは演者の先生が見えない程広い部屋でした。このホールには大きなスクリーンが3つ備えられており、Live Surgery Programでは圧倒される臨場感がありました。

7日と8日には私自身の3つの発表がありました。1つ目は朝8時からのpodium sessionにも関わらず、大勢の先生が開始時間前から詰めかけており、その熱心さに驚かされました。つたない英語での発表にも関わらず質問もしてもらい、podiumの雰囲気を十二分に味わうことができました（的確には答えられませんが、）。残りの2つはposter sessionでの発表でした。Posterの前で多くの海外の先生に質問やアドバイスを頂き、podium sessionとは異なる聴衆の先生との距離の近さを感じました。

7日夜にはメンターでもあるエモリー大学泌尿器科のChad W.M. Ritenour先生が、同chairmanのMartin G. Sanda先生、そしてレジデントの先生を交えて夕食会を開いてくださいました。米国の泌尿器科レジデントの研修システムや環境等について伺うことができました。7日・8日にはAUA resident bowlに参加しました。MCQ形式で問題が提示されましたが、性機能に関する問題が多く、逆に癌の薬物治療に関する問題は殆どなく、日本と米国の泌尿器科医の関心の違いを実感しました。その



Figure 1 エモリー大学泌尿器科のChad W.M. Ritenour先生との夕食会。前列左より、筆者、Chad W.M. Ritenour先生、滑川剛先生（千葉大）、後列左より、Dr. Jonathan Huang, Dr. Charles Lorentz, Dr. Samuel David, Prof. Martin G. Sanda

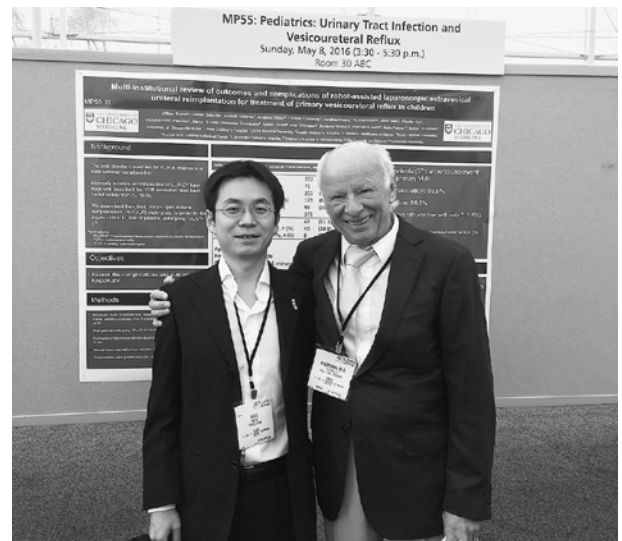


Figure 2 学会場にて、Richard E. Hutmann先生と。

他、Grand receptionやPresident receptionにも参加させて頂いていただくことができました。

これ以外にも紙面で伝えきれない貴重な経験ができ、このプログラムを通じて泌尿器科医として成長することができ、そしてより一層の精進を重ねていく決意を新たにしました。末筆ながら、このような機会を与えていただきましたJUA・AUA両学会関係者の皆様方に御礼申し上げますとともに、来年以降もこの素晴らしいプログラムが継続、発展していくことを強く祈念いたします。